EAST-EAST 5
2022
Document
Book

公益社団法人日本建築家協会 国際委員会

はじめに

本報告書は2022年9月にリトアニア共和国カウナス市の「欧州文化首都 2022」および「カウナス建築フェスティバル 2022」にあわせておこなわれた「EAST-EAST 5」リトアニア・日本建築家交流イベントの記録のために制作されました。

—

「EAST-EAST」は欧州の東にあるリトアニアとアジアの東にある日本、両国の建築家協会（リトアニア建築家協会/LAS、日本建築家協会/JIA）の共催により 2002年に始まり、過去4回（2002年、2009年、2011年、2013年）の開催を通してリトアニアと日本の間の建築家・建築学生の交流の基礎を築いてきました。第5回であるEAST-EAST 5では、コロナ禍により大きく変化した両国の建築家の意識を共有すると共に若い世代の建築家にバトンをつなぎ、20年にわたる両国建築界の交流を未来へ引き継ぐことが目的に据えられました。

—

両国の共同による企画打合せはオンラインで進められ、過去のEAST-EASTの参加建築家の一人である国広ジョージ氏を総合ディレクターに、西田司氏を中心とする日本側のキュレーターチームは「継承」を念頭におきながら新しい要素、イベント全体を通すテーマの設定、ハンギングスクロール型の展示形式から小さな模型を見せる展示形式への更新、オンラインによる事前ワークショップなどを提案しこれが実現しました。また、リトアニア側キュレーターチームの尽力により、現地での基調講演と公開フォーラムのライブ配信も初めて実現しました。これらの活動は、欧州文化首都における日本関連プログラムを支援するEU・ジャパンフェスト日本委員会からの支援金とJIAの国際活動費によって運営実行されました。

—

本報告書によって過去20年に渡ってのEAST-EASTの取り組みが発展的に継承されていくことを願います。

—

主催者

EAST-EAST 5 開催概要

メインテーマ
RECOVERY（リカバリー）

—

開催地
カウナス、リトアニア

—

会期
2022年9月23日［金］–26日［月］
展覧会は10月23日［日］まで

—

主催（共催）
リトアニア建築家協会
（公社）日本建築家協会

—

後援
駐日リトアニア共和国大使館
（社）日本建築学会
（公社）日本建築士会連合会
（社）日本建築士事務所協会連合会
（社）日本建設業連合会
（財）日本建築センター
（公財）建築技術者教育普及センター

—

協力
カウナス工科大学

—

欧州文化首都 2022/カウナス建築フェスティバル 2022/
第30回EU・ジャパンフェスト支援プロジェクト/
リトアニア・カウンシル・フォー・カルチャー支援プロジェクト/
日本リトアニア友好100周年関連行事

—

—

実施スケジュール

2022年8月22日–26日	学生ワークショップ 「Play Earth（地球と遊ぶ）」 （オンライン）
8月29日	プレイベント 「EAST-EAST Mini Review」 （東京/建築家会館大ホール）
9月23日	基調講演、公開フォーラム「Bridging」 （カウナス/ジャルギリス・アリーナ） 展覧会オープニング
9月23日–10月23日	展覧会 「Recipe for Recovery（回復のレシピ）」 （旧カウナス中央郵便局）
9月24日–26日	学生ワークショップ プレゼンテーション （カウナス工科大学） エクスカーション（カウナス、ヴィリニュス）
9月27日–28日	エストニア訪問 （タリン、タルトゥ/エストニア国立博物館）
2023年2月22日	報告会 「“Recovery” Planetary Imagination ～Play Ecology リトアニア・日本の建築的都市的状況」 （東京/建築家会館大ホール）

EAST-EAST 5 メインテーマ紹介

RECOVERY

何世紀もの間、建築家は「ビジョン」の力を持っていた。その力は、自然の景観や生態系を変え、広大な土地を再利用し、何マイルものインフラで地球を穿ち、膨大な資源を消費し、何百万もの人々を貧困から救い、そして地球の気候を変えてきた。しかし、人類は現在、いくつかの存立のジレンマに直面している。自然の景観を維持しながら、急速な都市化にどう対処すればよいのか。都市はどのようにして、困っている人々を支援し、競争力を維持し、より公平な社会の実現に貢献できるのか。進歩を妨げることなく気候変動に対応するために、私たちはどのような行動をとることができるのか。複雑な官僚主義的な意思決定や実施プロセスにもかかわらず、グローバルな変革を加速させるにはどうすればよいのか。過去の過ちを修正し、革新のための勇気を持ち続けるにはどうすればよいか。物理的資源が有限である地球上で経済成長を促すにはどうしたらよいのか。

—

私たちの現在の建築用語は、土地、材料、生態系、社会基盤など、既存の資源を犠牲にして開発を行うことに限られている。将来世代のための資源を過剰に消費するのではなく、既存の都市組織を治癒するための新しいプロジェクトや開発を保証するパラダイムシフトが必要なのだ。治癒とは、傷ついた都市組織を手当し、生態系の骨格を強化し、経済の筋肉を鍛え、切れた社会の靭帯を再構築する必要があるという意味である。いくつかの切開をしなければならず、いくつかの傷跡は残るだろうが、これによって私たちはこれまで以上に健やかな強さを獲得するだろう。

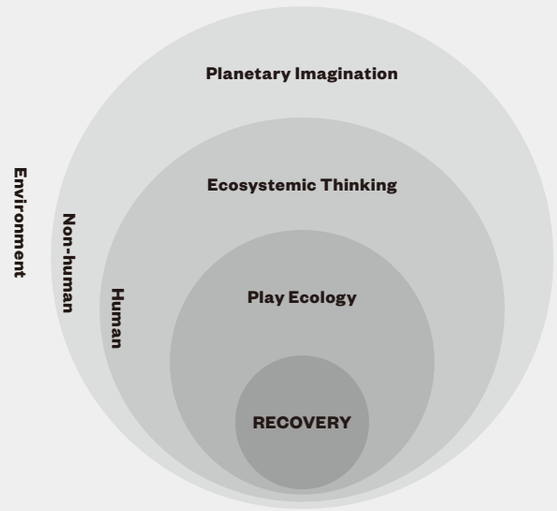


DIAGRAM
RECOVERYという全体テーマに対して3つのサブテーマを設定した。
1つ目は「Play Ecology」。人々相互の交流を回復し、
コミュニティの持つエコロジカルな側面を回復すること。
2つ目は「Ecosystemic Thinking」。人間だけでなく動物や植物、
無機物なども含んだ存在者とのネットワークの回復を問うた。
3つ目は「Planetary Imagination」で、昨今の環境問題への
取り組みも含め、地球という惑星そのものへの想像力を回復するような
プロジェクトの可能性を意図した。
出展者、作品、フォーラム、ワークショップは
これら3つのサブテーマを前提に実施された。

Time for recovery

ギンタラス・バルチーティス｜建築家
Gintaras Balčytis｜Architect

Head of Kaunas Architecture Festival, Curator General of "East-East 5"

photo: Rusnė Balčytis

KAFe（カウナス建築フェスティバル）2022／East-East 5は「Recovery」をテーマに2022年9月23日に開幕しました。今日、建築というテーマは格別に重要なものとなってきています。人間の活動は私たちを取り巻く環境を大きく変え、技術革新、産業発展のスピード、都市のスプロール化、人口密度などが持続可能な生活のあり方をゆがめ、地球の天然資源の潜在力を枯渇させつつあるのです。私たちは、今日、そして未来に向けて、生きるための考え方を考え直しリフレッシュすべきです。今こそ、回復の時（Time for recovery）です。今こそ、自然やその表現が創造と運用のプロセスの優先事項となるような、質の高い建築プロジェクト、無駄のない、思慮深い都市開発のみを追求することが必要なのです。

—

これまでのKAFeの活動や数々のイベントを通して、私たちは都市やコミュニティにとっての建築の必要性を粘り強く主張してきました。100以上の展示、フォーラム、トーク、学生ワークショップ、建築エクスカーション、型破りな建築イベントを様々な形式でプロデュースし発表してきました。20以上の雑誌、カタログ、書籍が出版され、建築界のみにとどまらず評価されています。

—

KAFe2013では、「The city and its waterfronts」都心と河川の関係というタイムリーなテーマを取り上げ、このようなハイレベルな専門的イベントがカウナスで開催されるという驚きを建築の専門家や住民にもたらしました。KAFe2016「Restart your city centre」では、都市中心部の復興と再生の問題を探り、KAFe2019「Landmark Architecture—creating or destroying a city's identity?」では、新しい建物が既存の都市構造に与える影響に注目しました。
そして2022年は非常に重要なイベント「欧州文化首都2022カウナス」と重なり、KAFe2022はこの権威あるイベントの公式プログラムの一部として、異なる国や文化の間の専門的な協力に焦点をあてることとなりました。プログラムを企画する中、リトアニアと日本の共同建築プロジェクトである「East-East」は、再び建築界を巻き込む良い機会になると考えました。世界の東に位置し1億2500万人が住む日本と、ヨーロッパの東に位置し約300万人が住むリトアニア。歴史も文化的伝統も異なる二つの国の建築協力は20周年を迎えます。これまでの「East-East」にはリトアニアと日本のあらゆる年代の最もクリエイティブな建築家、そして建築学生が参加して、講演、展示、討論、学生向けのワークショップなどが行われ、リトアニアと日本の建築家の交流と職業上の親睦の基礎を築いてきました。リトアニアは、建築分野で日本とこれほど高いレベルの長期にわたる協力関係を築いているEU内で唯一の国です。こうして「East-East 5」は、カウナス建築フェスティバルの国際的な側面、そしてリトアニアと日本の友好100周年記念という側面も完璧に反映しながら実現に至りました。

—

したがって、KAFe2022／East-East 5がメインテーマに「Recovery」、展示テーマに「Recipe for Recovery」、学生ワークショップのテーマに「Play Earth」を取り上げることは偶然ではありません。このアイデアを日本建築家協会、リトアニア建築家協会とそのカウナス支部が支持発展させたことは喜ばしいことです。「East-East」プロジェクトの発案者である外交官のダイニュス・カマイティス氏（前駐日リトアニア共和国大使、2006－2011年）が二国をつなぎ、「欧州文化首都2022カウナス」事務局、リトアニア文化評議会、EU・ジャパンフェスト日本委員会から資金的な支援をいただき、本イベントのパートナーであるカウナス工科大学からは組織的な支援をいただきました。これらの支援と、プログラムリーダー、キュレーター、コーディネーターたち（Paulius Vaitiekūnas、Martynas Marozas、Jautra Bernotaitė、Andrius Ropolas、Laura Baltkojytė、国広ジョージ、西田司、川勝真一、海法圭、蔵楽友美ほか多くの方々／敬称略）の努力なしでは、これほどの規模のイベントの企画、実現には至らなかったと思われます。心から感謝しています。

—

このイベントが若い世代の建築家たちの協力に新たな弾みをつけ、日本とリトアニアの建築家が力を合わせることで、刷新のためのアイデアとその方法を模索することに貢献できるものと確信しています。

未来への継承

国広ジョージ｜建築家, FAIA, FJIA
George Kunihiro｜Architect, FAIA, FJIA

East-East 5 総合ディレクター

photo: Studio Loody

2022年9月23日、「East-East 5建築イベント」がリトアニア共和国の第二の都市カウナス市で幕を開けました。このイベント開催にあたって、ダイニュス・カマイティス前駐日リトアニア大使からご連絡を頂いたのはコロナ禍の最中2021年春でした。そして、公益社団法人日本建築家協会（JIA）と日本を代表する新世代の建築家10名とで約一年間の準備の末、隈研吾氏による基調講演と日本、リトアニア両国の代表建築家たちによるシンポジウム、建築作品展でEast-East 5は無事開催に至ったのです。

—

リトアニア共和国と日本の国際交流イベント「East-East 建築イベント」は、2002年に当時の駐日リトアニア大使ダイニュス・カマイティス氏の提案により、親交があったJIA建築家芦原太郎氏が音頭をとり、日本から14名の建築家が参加して開催されました。そして、槇文彦団長のもと7名の代表建築家たちが現地カウナスを訪問し、開会式ではValdas Adamkus大統領がご列席され、展覧会、公開フォーラム、学生ワークショップなどのイベントを通した国際親善に貢献しました。

—

そして2022年、カウナス市は欧州連合（EU）より「欧州文化首都」に指定され、一年を通してさまざまな分野による文化的イベントが開催されています。これに先立ち、現地の建築分野を担うリトアニア建築家協会でもこれに乗じて国際的イベントの企画が行われました。その際、同協会では20年という節目となるEast-East建築イベントを建築分野が自信をもって欧州文化首都のイベントとして披露する決意を固められました。

—

冒頭で説明いたしましたが、この企画の日本への橋渡しをされたのは、East-Eastの発案者であるカマイティス前大使でした。私は、昨年夏にカマイティス氏よりEast-East 5の企画についての連絡を頂きました。その内容は、過去の二国間交流をさらに拡大した「欧州文化首都」という大陸規模のスケールとなる国際イベントに位置付けられた企画でした。これを受けて、JIA国際委員会は日本側の企画チームと参加建築家の選考を行い、その後両国間のディレクターたちの度重なるオンライン会議の結果、現地で開催する展覧会、公開フォーラム、そして学生ワークショップのプログラムが完成に至ったのでした。

—

私は、第1回からEast-Eastイベントに参加して参りましたが、両国の建築家が集まる5回目のイベントを機に20年の歴史を振り返り、改めてEast-Eastの国際親善への貢献を確認致しました。そして、この度East-East 5の総合ディレクターを拝命し、その上で、East-Eastの未来への継承を念頭に置き、30－40代世代の建築家たちを代表としてカウナス市に送ることを提案し、西田司ディレクターの絶妙な考案により展覧会キュレーターに川勝真一氏、WSキュレーターには海法圭氏、フォーラムキュレーターに吉村靖孝氏を起用することになりました。こうしてディレクターたちと共に参加建築家が決定し、素晴らしい代表団を結成することが実現致しました。

—

East-East 5が成功裏に閉幕し、両国の建築家と学生たちはリトアニアと日本、そして欧州連合（EU）との国際親善に貢献し、新たに建築界の功績が歴史に綴られることになったことを総合ディレクターとして誇りに思います。今後、彼らが次世代のEast-Eastイベントを末長く継続することを願うと共に、代表建築家たちの世代による国際的な活動を奨励し応援致します。

展覧会

Recipe for Recovery

|会場|カウナス・リトアニア、旧カウナス中央郵便局||期間|2022年9月23日–10月23日

展覧会はかつてカウナス市の郵便局だった魅力的な近代建築の1階を会場として実施された。展覧会タイトルを「Recipe for Recovery」とし、結果としての建築物だけでなく、そのプロセス、作り方にフォーカスを当てた展示が試みられた。リトアニア側からの要請によって写真やパース、図面に加え、小さな模型やモックアップ、マテリアルのサンプルを設置した。

–

各展示は3つのサブテーマに対して緩やかに応答したものとなった。以下、日本人建築家の展示についてサブテーマにそって紹介する。まず人々の有機的な関係性や相互作用を回復させることを出発点に、より大きなスケールへのアプローチを試みる「Play Ecology」に関する展示として、西田の公と私の2項対立を超えたコモンとしてのシェアスペースを持つ学生寮や、冨永の敷地周辺のマイクロな出来事やマテリアルをネットワークさせ場所の魅力を耕すような改修のプロジェクト、また津川の機能主義では捉えられない身体性を伴った地形のような造形が多様な人々の集う居場所を生み出す広場の事例などが挙げられる。また人間以外の存在物との関係をいかに構築しうるかという「Ecosystemic Thinking」という考え方に対しては、ニワトリのための村を構想した吉村のプロジェクトや、敷地の半分を立体的な庭とし、植物との暮らしのあり方を問いかける山田の住宅、建築そのものではない敷地のリノベーションを介して環境へと介入する増田の取り組み、さらに日本の典型的な住宅を部材レベルで検証し、国外での再構成を試みる門脇のプロジェクトなどにその糸口を見出すことができる。そして、雪という自然物とのローカルな結びつきを建築の設計に取り込んだ海法や、土という存在に向き合い環境にも配慮した建築を模索する能作、海水から真水を生成する際に生まれる大量の塩を新たな建築のマテリアルとして捉えようとする寺本、地球スケールで刻まれた人類の痕跡を建築に取り込む田根らのプロジェクトは「Planetary Imagination」へと結びつく思考や感性が感じられる。リトアニアサイドの建築家たちのプロジェクトにも、敷地の環境への応答や、環境負荷を最小限にするようなアプローチ、コミュニティとの協働など多様な実践が見受けられた。会場構成においては、日本とリトアニアの建築家の作品を明確にエリアで分けず、両者のプロジェクトが適度に混ざり合う状態が生まれていた。そのことは対比や違いの強調よりも、両者の中に共通性を見出し、それらをネットワーク化することに繋がったのではないだろうか。

展覧会出展建築家

–

（日本）
- 西田司［ondesign］
- 海法圭［海法圭建築設計事務所］
- 吉村靖孝［吉村靖孝建築設計事務所］
- 門脇耕三［アソシエイツ・明治大学］
- 田根剛［Atelier Tsuyoshi Tane Architects］
- 津川恵理［ALTEMY］
- 寺本健一［Office of Teramoto］
- 増田信吾［増田信吾＋大坪克亘建築設計事務所］
- 山田紗子［山田紗子建築設計事務所］
- 冨永美保［トミトアーキテクチャ］
- 能作文徳［能作文徳建築設計事務所］

–

（リトアニア）
- Audrius Ambrasas
- DO ARCHITECTS
- Gintaras Balčytis
- A2SM Architects
- Aketuri Architects
- G. Natkevičius & Partneriai
- Paleko architektų studija + architektų studija Plasma
- Office de Achitectura
- Processoffice
- Vilniaus architektūros studija
- ARCHES
- Šarūno Kiaunės projektavimo studija
- Archinova + PLH Arkitekter
- Nebrau
- Laurynas Žakevičius
- LG projektai & GAL architektai

EXHIBITION

fig. 1　展示風景。出展建築家には1プロジェクトあたり1つのテーブルが割り振られ、その上で自由なプレゼンテーションが展開した。
これらの展示物は近日開館が予定されるNational Architectural Museumの収蔵品として寄贈される

fig. 2　展覧会オープニングイベントの様子

EXHIBITION

fig. 3　展示を見る欧州文化首都2022カウナス代表のVirginija Vitkienė氏（中央）

fig. 4　オープニングイベントで展示物をみる観客

fig. 5　山田紗子「daita2019」模型

fig. 6　AKETURI「HOUSE IN VILNIUS」模型

EXHIBITION

fig. 7　冨永美保「霞の目 ナミワケ荘」模型

fig. 8　寺本健一「K-PROJECT」模型

建築家フォーラム

Bridging

|会場|カウナス・リトアニア、ジャルギリス・アリーナ||期間|2022年9月23日

建築フォーラムは、カウナス市の現代建築の1つであるジャルギリス・アリーナで行われた。カウナス市の歴史的な街並みが残る中心市街地は、ネムナス川とニュリス川の合流点に位置するが、ジャルギルス・アリーナは、そのネムナス川の中洲にあり、市街地から全景がよく見える。スポーツ施設であると同時に、コンベンションや文化イベントにも使用されており、欧州文化首都のプログラムにも多く使用されている。建築フォーラムは、「欧州文化首都2022」および「カウナス建築フェスティバル2022」のメインプログラムであったため、カウナスの建築家に留まらず、首都のヴィリニュスをはじめ、リトアニアの各地から建築家や建築関係者が集まる大変期待値の高いイベントであった。

基調講演は隈研吾氏が担い、午前と午後で、日本とリトアニアの建築家が、交互にプレゼンテーションを行い、5人1組でクロストークを行うというプログラムであった。全体テーマの「RECOVERY（リカバリー）」を「bridging（ブリッジング）」するフォーラムの日本側のプログラムディレクターと進行役は、吉村靖孝氏が担った。

午前の部は、日本側は、海法圭、山田紗子、西田司が、リトアニア側は、ŠAアトリエの2人（Gabrielė Šarkauskienė & Antanas Šarkauskas）、ProcessofficeのVytautas Biekšaがプレゼンテーションを行い、その内容に関してクロストークを行った。海法のプレゼンは、東京の都市風景と田んぼの風景を比較し、電車や人の速度で建築を考えるのと、ゆったりとした田んぼの風景で建築を考える違いや面白さに関して気づきを与え、山田は建築と植物を同じように捉えたとき、植物と建材のバランスや難しさに関して考えさせるプレゼンであった。ŠAアトリエは、大きなビジョンではなく、小さな要素や素材から空間をつくる手法を紹介した。プロジェクトで触れていた湿地帯の生態系と建築を一緒に考えるものは、RECOVERY（リカバリー）的なアイデアを内包し、Vytautas Biekšaは、歴史的建築と現代建築の混在するボリューム間に、公共空間をつくるプロジェクトを紹介し、新旧の建築物の互いの影響についてプレゼンし、新築をバランスさせていく難しさを共有した。クロストークでは、リトアニアの進行役から日本の侘び寂びについての言及があり、海法から日本人は、光や影など環境のあらゆるところに神を想像する文化背景を説明し、想像することで全体像を補完する「imperfection（不完全さ）」の可能性や創造性について議論が展開した。

午後の部は、日本側から吉村靖孝、増田信吾、寺本健一が、リトアニア側からAFTER PARTYの2人（Gabrielė Ubarevičiūtė & Giedrius Mamavičius）、ARCHESのEdgaras Neniškisがプレゼンテーションを行い、午前と同様にクロストークを行った。吉村のプレゼンは、「Ten Recipes for Recovery」と題し、鶏小屋や屋上、モバイルなど自然環境と応答する10の切り口で建築をレシピとして紹介し、増田は目に見えない信仰に関わる部分などビヨンドアーキテクチャと建築について触れ、寺本はヴェネチアビエンナーレで金獅子賞を獲得した海水を淡水に変える際に出るサブカ（塩）を建築に応用していくプロセスをプレゼンした。AFTER PARTYは、2008年以降経済が下がった際に建築ができることを意識することでRECOVERY（リカバリー）を考えるようになったと話し、Edgaras Neniškisは、アーキテクチャル・アプローチと題し自身の多くのプロジェクトをプレゼンした。クロストークでは、午前と同様に、建築だけで自立することでは捉えきれないアプローチを持つことがリカバリーをテーマにした建築家の思考にあり、そこから創造行為に繋げていく設計の面白さに気付かされた。最後に隈研吾氏の基調講演は、それらの議論を歴史や環境と紐づけるような内容で、RECOVERY（リカバリー）が現代的なテーマであることを確認し、隈建築の作品の多様さを通して、300人を超える超満員の会場に届ける素晴らしい講演であった。

フォーラムを通して、モダニズム以降の近現代建築では、敷地の中に完璧な建築を作る手法を模索し、建築を自立的に捉えがちで、そのため外の環境や歴史の文脈と切断が起こっていた。今回のテーマRECOVERY（リカバリー）は、環境の循環や歴史的な文脈から建築を考えるようになることで、建築だけで自立することとは違う、拡がりや連環を持つことになる。それはすなわち、建築家それぞれが、建築単体ではストーリーを語りきれない＝「imperfection（不完全さ）」を建築が持つことを創造行為そのものとして捉えており、興味深い議論であった。 ——西田司

基調講演
「GO BACK TO NATURE」
- 隈研吾［隈研吾建築都市設計事務所］

セッション1
- 西田司［ondesign］
- Gabrielė Šarkauskienė and Antanas Šarkauskas［ŠA Atelier］
- 山田紗子［山田紗子建築設計事務所］
- Vytautas Biekša［Processoffice］
- 海法圭［海法圭建築設計事務所］

セッション2
- 吉村靖孝［吉村靖孝建築設計事務所］
- Gabrielė Ubarevičiūtė and Giedrius Mamavičius［AFTER PARTY］
- 寺本健一［Office of Teramoto］
- Edgaras Neniškis［Arches（Lietuva）］
- 増田信吾［増田信吾＋大坪克亘建築設計事務所］

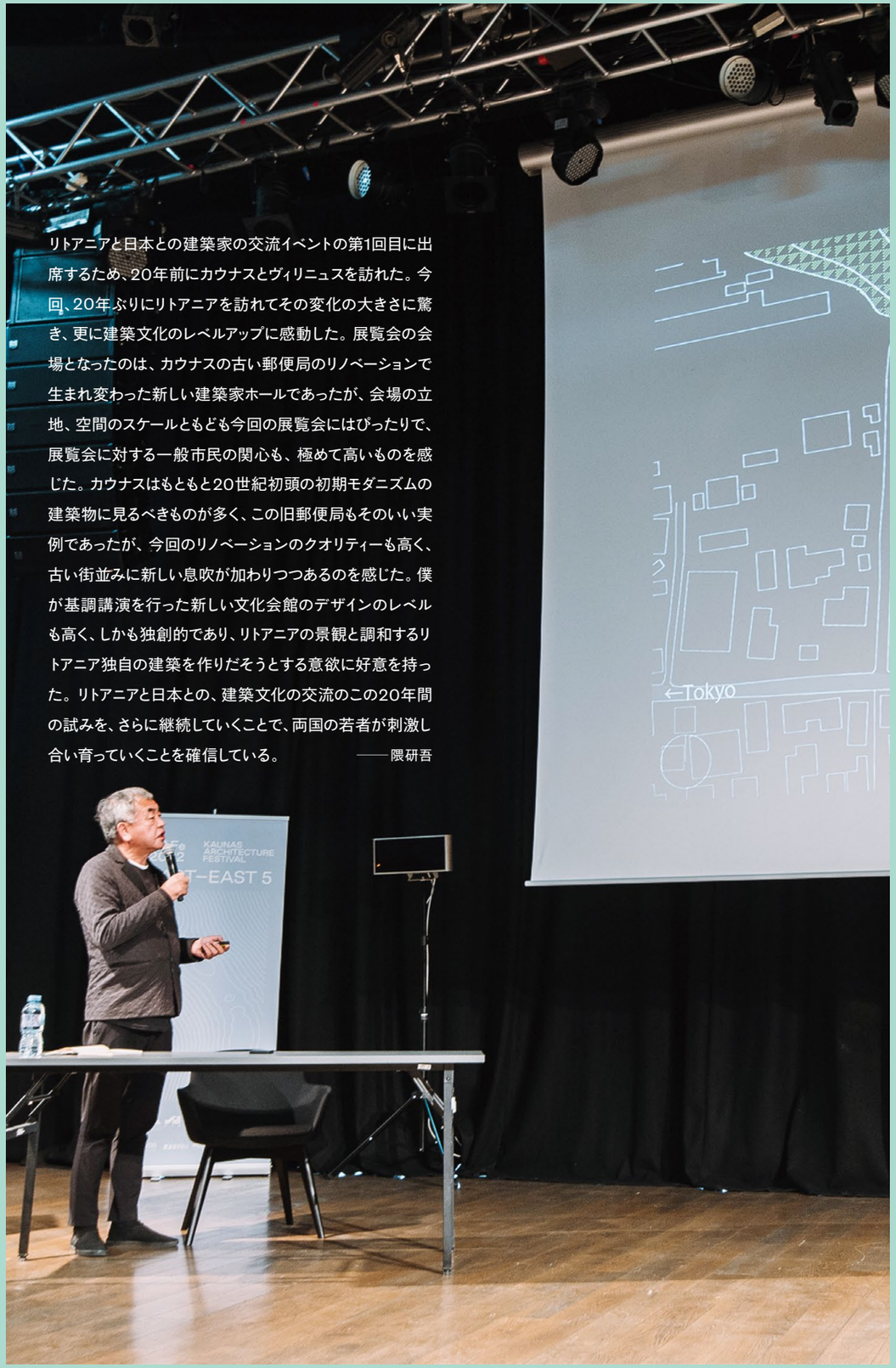
FORUM

fig. 1　午前中のセッションの様子。左からモデレーターのアンドゥリュス・ロポラス氏、ルタ・レイテナイテ氏（リトアニア建築家協会会長）、Vytautas Biekša氏、Antanas Šarkauskas氏、海法圭氏、山田紗子氏、西田司氏、吉村靖孝氏

fig. 2　午後のセッション。左からアンドゥリュス・ロポラス氏、ルタ・レイテナイテ氏、Edgaras Neniškis氏、Giedrius Mamavičius氏、Gabrielė Ubarevičiūtė氏、増田信吾氏、寺本健一氏、吉村靖孝氏

FORUM

fig. 3　300人を超える観衆が駆けつけた隈研吾氏の基調講演



リトアニアと日本との建築家の交流イベントの第1回目に出席するため、20年前にカウナスとヴィリニュスを訪れた。今回、20年ぶりにリトアニアを訪れてその変化の大きさに驚き、更に建築文化のレベルアップに感動した。展覧会の会場となったのは、カウナスの古い郵便局のリノベーションで生まれ変わった新しい建築家ホールであったが、会場の立地、空間のスケールともども今回の展覧会にはぴったりで、展覧会に対する一般市民の関心も、極めて高いものを感じた。カウナスはもともと20世紀初頭の初期モダニズムの建築物に見るべきものが多く、この旧郵便局もそのいい実例であったが、今回のリノベーションのクオリティーも高く、古い街並みに新しい息吹が加わりつつあるのを感じた。僕が基調講演を行った新しい文化会館のデザインのレベルも高く、しかも独創的であり、リトアニアの景観と調和するリトアニア独自の建築を作りだそうとする意欲に好意を持った。リトアニアと日本との、建築文化の交流のこの20年間の試みを、さらに継続していくことで、両国の若者が刺激し合い育っていくことを確信している。　——隈研吾

学生ワークショップ

Play Earth

|会場|カウナス・リトアニア、カウナス工科大学||期間|2022年8月22日–26日［オンラインワークショップ］/9月24日–26日［現地ワークショップ+プレゼンテーション］

日本とリトアニアから学生を募り、カウナスにある未完成の建築「ブリタニカ・ホテル」を舞台に両国混合の5組のデザインチームがそれぞれ異なるデザインアプローチを提案する学生ワークショップを実施した。テーマは「Play Earth（地球と遊ぶ）」。5つのデザインアプローチに沿って、両国の学生がこれからの社会に求められる新しい建築像を探った。

—

5つのデザインアプローチ

1 Play with the Ecosystems——生態系と遊ぶ
2 Play with the People——人々と遊ぶ
3 Play with the Economy——経済と遊ぶ
4 Play with the Culture——文化と遊ぶ
5 Play with the Energy——エネルギーと遊ぶ

—

全体は2フェイズに分かれており、前半は渡航前に開催するオンラインWS、後半はリトアニアに渡ったのちに対面で実施した。

オンラインWSは8月後半の5日間でzoomとmiroを活用して行われた。僕自身、学生および講師として10回程度の国際WSの参加経験はあったが、オンラインWSは初めてであり、非常に難しい試みになると予想されたが、結果は大成功であったと思う。最終講評日をもうけ、建築家にゲストクリティークとして参加いただいた。miroに5チームの活動状況や履歴がリアルタイムに可視化される。全チームが活動する画面の様子は、全体の一体感と躍動感を感じられるダイナミックな風景であった。今回の取組みを通して、対面WSよりも以下の点で優れていると感じた。

—

- 他チームの検討内容をリアルタイムで覗き見ることが容易な点。タイトな日程の中で、全体を俯瞰できるため提案全体のクオリティのボトムアップやタイムマネジメントのミス防止等につながる。
- 6時間の時差を利用することによる検討の継続性確保、言語を時差を利用してスイッチすることで思考の深化と多層化、同時にストレス低減につながる。（朝9時から日本人2人が検討を開始し、15時（リトアニアで9時）にチーム4人で議論と検討、その後日本人が寝たあとはリトアニア人2人が検討を継続する形式による。）

—

その後の対面WSは、カウナス工科大学を会場に2日にわたって開催した。オンラインWSでの成果物をより進化させ最終プレゼンを行なった。提案は多岐にわたった。例えば、生態系を研究するラボを増築し、農園やキャンプ場のある「循環型」研究施設の提案や、幼稚園を併設した地域のエネルギープラントとして再生しつつ瞑想・ヨガ・調理などの新たなアクティビティの風景と太陽光パネルがビルのファサードに垂直的に立ち現れる施設の提案、「バブル」という伸縮自在な柔らかいコモンスペースを建物内外に散りばめて「放棄」の象徴であるリジッドな建物を地域に開放し、物理的にもやわらげようとするユニークな提案などがあった。

—

西田氏からは廃墟すなわち屋外空間として30年間残り続けてきたその価値を尊重し、屋外空間をいかに残し設計するかが重要であるという指摘があった。田根氏からは建築家としてもっと勇敢に提案してほしいという激励のコメントがあった。その他参加建築家からさまざまな講評コメントがあり白熱した時間となった。WSキュレーターとして総括するならば、カウナスの中心で放棄の象徴であり続けたブリタニカホテルをいかに開き、人・自然・まちと繋ぎ直し、どのような新しい象徴性を獲得させられるかが重要な命題であったと思われる。そういう意味でどの提案も新しい象徴性の萌芽を感じさせてくれたことにWSの成功を感じている。　——海法圭

参加学生
- 清水耀葉［東京理科大学大学院］
- 北垣直輝［京都大学大学院］
- 佐藤啓花［京都大学大学院］
- 須佐基輝［明治大学大学院］
- 柴垣映里奈［東京大学大学院］
- 木村哲［東京理科大学大学院］
- 安藤尚哉［芝浦工業大学大学院］
- 野田夢乃［早稲田大学大学院］
- 木嶋真子［法政大学大学院］
- 酒向正都［信州大学大学院］
- Adelė Astrauskaitė
- Auksė Vilkevičiūtė
- Ignas Arlauskas
- Gabrielė Ibėnaitė
- Martynas Stakvilevičius
- Patricija Markevičiūtė
- Tautvydas Zykevičius
- Vilius Jagminas

WORKSHOP

WORKSHOP

fig. 1　両国のワークショップキュレーター、マルティナス・マローザスと海法圭に加え、AFTER PARTY（Gabrielė UbarevičiūtėとGiedrius Mamavičius）、Gintarė Kapočiūtė、西田司、川勝真一、門脇耕三、山田紗子、増田信吾、津川恵理らが指導やゲストクリティークに加わった

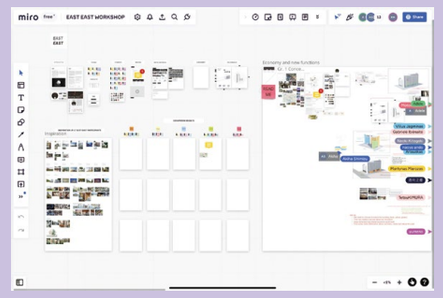


fig. 2　5チームの活動状況や履歴がリアルタイムに可視化されるmiroの作業画面

fig. 3　カウナス市での学生同士の交流の様子

fig. 4　カウナス工科大学での最終発表風景

fig. 5　最終プレゼンテーション後の集合写真

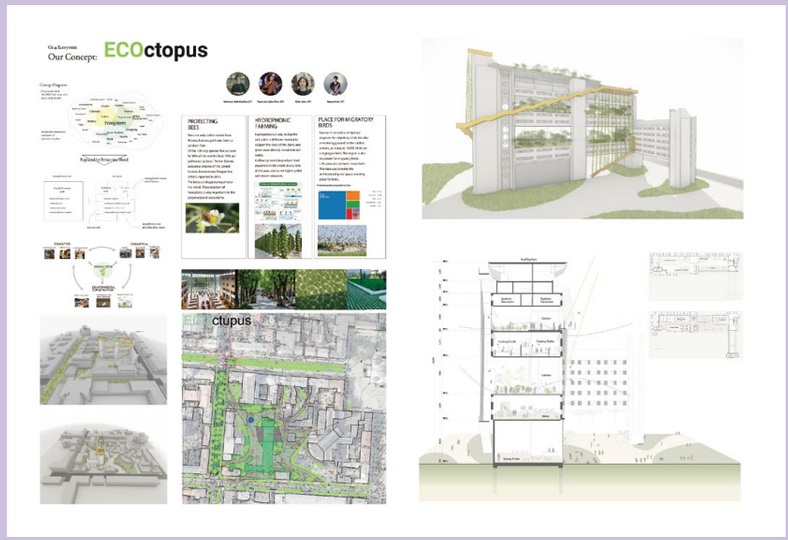


fig. 6　学生作品「ECOctopus」

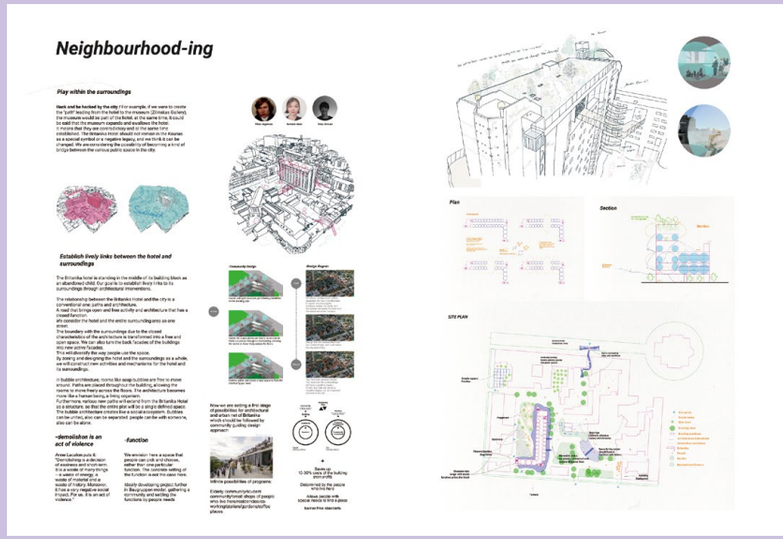


fig. 7　学生作品「Neighbourhood-ing」

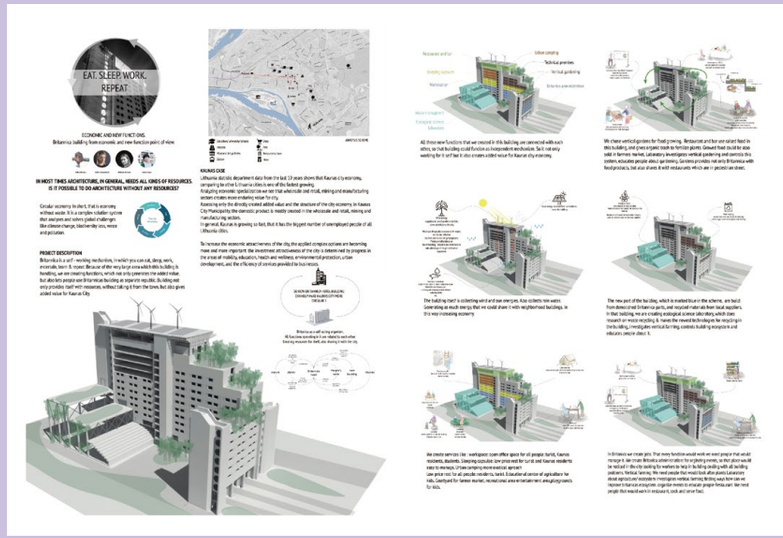


fig. 8　学生作品「EAT.SLEEP.WORK.REPEAT」

fig. 9 学生作品
「CULTURAL PLAYGROUND IN KAUNAS」

fig. 10 学生作品
「PLAY ENERGY!」

エクスカーション

Excursion

|期間|2022年9月24日［カウナス・リトアニア］/25日［ヴィリニュス・リトアニア］/27–28日［タリン/タルトゥ・エストニア］|（希望者のみ）

滞在期間中には、カウナスとヴィリニュスをめぐるバスツアーを楽しんだ。カウナスでは、活動場所としていた中心市街地を離れて、リトアニアを代表するモダニズム建築（house of pranas gudavicius and aleksandra iljiniene）や杉原千畝記念館、郊外に開発された自然豊かな住宅街などを訪ねた。

—

ヴィリニュスにおいては、リトアニアが過去にポーランドと同じ国であったことやソビエト時代があることが、旧市街にゴシック、ロココ、新古典主義など多様な建築様式が混在している点に色濃く感じられた。例えばベルナルディン教会は、ルネッサンスやバロックの影響も感じられるゴシック教会で、ソビエト時代には軍用宿舎として活用されていたとのこと。冷戦後に修道女が戻り、改修を経て現在に至っている。郊外には、ソビエト時代の建物が大量に広がっており、それを象徴するテレビ塔など、当時の様子を色濃く残す都市地域を形成していた。また冷戦以降のリトアニアは経済成長を続けており、ネリス川右岸は大規模な再開発地区として注目されている。一見大規模建築が乱立する風景を生み出しているが、開発計画の一端に携わっているMartynas氏との会話の中で、昔からある道を保存、復活するなど「Recovery」の視点を可能な限りで持ちつつ計画進行している、という言葉が印象に残っている。

—

学生と一部の建築家はオプショナルツアーと銘打ち、田根氏にアテンドいただいてエストニアに赴く貴重な機会を得た。ここにおいても歴史の重厚さを体得するツアーとなった。タルトゥのエストニア国立博物館は負の遺産であるソ連の軍用地の跡地において、その象徴である滑走路を抹消することなく未来につなぐように力強い軸線の建築に結実させている。その歴史の重ね方を直に体感する素晴らしい機会となった。またエストニアとリトアニアを相対化する機会を得られたことも大きい。

——海法圭

カウナス・リトアニア

fig. 1　カウナス市内の近代建築に関する解説を聞く

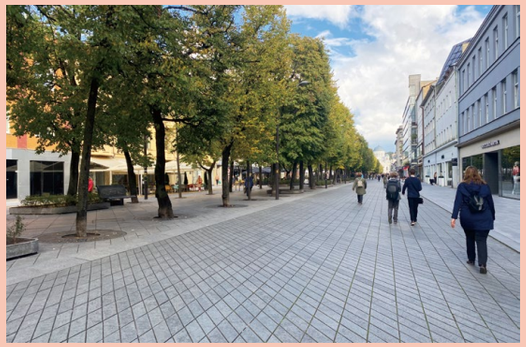


fig. 2　新市街の中心を貫く大通り

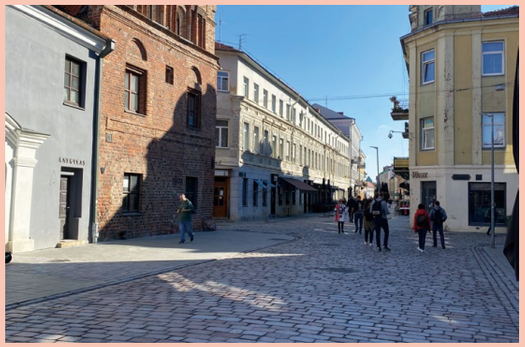


fig. 3　中世からの街並みが残る旧市街

fig. 4　郊外に建てられた近年の住宅建築の例

fig. 5　在カウナス日本領事館・領事代理であった外交官の杉原千畝記念館

EXCURSION

ヴィリニュス・リトアニア

fig. 6　旧市街の中心に建つヴィリニュス大聖堂

fig. 7　旧ソ連時代に建てられた集合住宅

fig. 8　現代的なビルが立ち並ぶネリス川右岸

fig. 9　近年開発された高級住宅街

タリン/タルトゥ・エストニア

fig. 10　エストニア国立博物館前での集合写真

fig. 11　博物館内部の展示の様子

fig. 12　タリン市内の再開発地区を視察

fig. 13　エストニアの建築博物館

EAST-EAST 5 に参加して

今回の出展者に見られた、リトアニアと日本の違いは資源の有限性に関する意識の違いではなかったかと思う。日本の建築家のあいだでは、20年前には新しかった既存建物の利活用や転用はすっかり一般的になっているが、いまではそれがさらに進んで、部材のリユースや、環境負荷の少ない伝統的な構工法の現代建築への応用が注目を集めている。対してリトアニアの建築家のあいだでは、新築によってかたちとしての新しさを如何につくるか、という問題意識が日本よりも強かったのではないかと感じた。

——門脇耕三［アソシエイツ株式会社・明治大学］

リトアニアの旧市街における歴史的背景を学ぶ機会となり、ソ連時代の影響下はあまり見当たらず、むしろそれ以前のポーランド時代における発展やバロック期における隆盛が歴史文化の根幹にあることを知ることとなった。またリトアニアの建築家と交流を深めることで、彼らが現在向き合っている社会状況や建築家制度について、また建設業における諸問題、同時代におけるグローバライゼーションについて様々な議論をおこなった。

——田根剛［Atelier Tsuyoshi Tane Architects］

リトアニアの建築家たちと並ぶとわかってくるのは、日本の建築は自分自身も含めて、概念に広がりがあるということでした。極小の都市計画的な見方もできる仕事もあったり、資本主義に対する物流の問題意識が設計につながっていたりするので、それぞれの展示が濃く感じました。リトアニアの建築家は、役割分担がしっかりしている分、建築の概念が明確なのかもしれません。

——増田信吾［増田信吾＋大坪克亘建築設計事務所］

建築のことだけでなく、むしろその他の異文化交流という点において多くを学べた。バックグラウンドの異なる人と共同作業を行う際の心構え、国際的な情勢に疎い日本の現在、海外での自分の表現の仕方など、考えさせられること、刺激の多い毎日であった。この貴重な6日間を共に過ごした学生との繋がりはこれからも大切にし、自分のできることを考えていきたいと感じた。

——清水耀葉［東京理科大学大学院 修士2年］

大変に学びの多い経験となった。海外で作品を制作する時に、いかにして自分の価値観を殺すことなく、素晴らしい案を一つにまとめるのかという主題がどれほど難易度の高いことで尊いものなのかを、この身をもって理解することができたことに非常に満足している。リトアニア現地の最終日に、自分の案の至らなさを自覚しつつも拙い英語でプレゼンテーションをする悔しさを、あの地から遠く離れた今でも鮮明に反芻することができる。

——北垣直輝［京都大学大学院 修士2年］

ワークショップの成果発表のリハーサルでは、発表する際の目線や話し方について細かく指導をいただいた。これまでプレゼンテーションの話し方について細かく指導を受けたことがなかったので勉強になった。田根さんの引率でエストニア観光とエストニア国立博物館の見学ができたのはとても贅沢な体験だった。エストニア国立博物館は建築そのもののデザインだけでなく、建築の設計によって荒地だった周辺環境が改善したことがとても評価されているようだ。

——佐藤啓花［京都大学大学院 修士2年］

今回のイベントでは海外の学生とのワークショップを通して、日本とリトアニアでの建築教育の違いや考え方の違いを学ぶことが出来ました。ワークショップでは、初めての海外の学生との交流であったため、言語による意思疎通の難しさと今後の意欲向上に繋がりました。カウナスは日本の京都のように趣のある都市で、教会を始めとした広場や歩行者専用道路など、人とまちとの距離が近い魅力的な場所でした。

——須佐基輝［明治大学大学院 修士1年］

EAST-EAST Mini Review

日時
2022年8月29日［月］18:30－20:30
会場
建築家会館大ホール
司会
国広ジョージ
企画
蔵楽友美［EAST-EAST5 コーディネーター］
主催
JIA国際委員会
登壇者（発表順）
国広ジョージ［EAST-EAST 1,2,3／EAST-EAST5 総合ディレクター］
佐藤尚巳［JIA会長］
ロカス・ダニリャヴィチュス［駐日リトアニア共和国大使館大使代理］
古谷誠章［EAST-EAST1,2,3,4］
ダイニュス・カマイティス［EAST-EAST発案者、元駐日リトアニア共和国特命全権大使］
芦原太郎［EAST-EAST1,2,3］
ギンタラス・バルチーティス［EAST-EAST 3,4／EAST-EAST5 Curator General］
小林正美［EAST-EAST3 workshop］
アンドゥリュス・ロポラス［EAST-EAST 5 Forum Curator］
横河健［EAST-EAST1,2,3］
大野秀敏［EAST-EAST1,3］
千葉学［EAST-EAST2,3,4］
ヤウトラ・ベルノタイティェ［EAST-EAST4 学生WS参加、EAST-EAST5 Catalogue Curator］
手塚貴晴［EAST-EAST2,3］
山本理顕［EAST-EAST2,3］
六鹿正治［JIA前会長］

EAST-EAST5のリトアニア側キュレーター 6名の来日を機にEAST-EASTレガシーを継承するプレイベント「EAST-EAST Mini Review」を東京で開催し、リトアニア側キュレーター6名、過去の日本側参加建築家、EAST-EAST5の日本側参加建築家と参加学生、JIA関係者が集い交流した。国広ジョージ氏による軽妙な司会進行のもと、過去の参加建築家がEAST-EASTに関する英語での短いレビュー（プレゼンテーション）をおこない、EAST-EAST5に参加する新しい世代を激励する楽しい歓迎会と壮行会となった。日本側で第1回EAST-EASTをとりまとめた芦原太郎氏はEAST-EASTの発案者である外交官ダイニュス・カマイティス氏の建築を通して両国の外交関係を築こうという意志を伝え、東日本大震災後のUIA2011東京大会の直前に開催されたEAST-EAST3でのリトアニアの建築家たちの来日に対しての感謝と思い出を述べたほか、カマイティス氏同様に外交官であったご尊父との親子の絆、いわば「EAST-EASTエピソード0」を紹介した。カマイティス氏自身もリトアニアからビデオで参加され、会場の参加者へメッセージを送った。

報告会「“Recovery” Planetary Imagination ～Play Ecology リトアニア・日本の建築的都市的状況」

日時
2023年2月22日［水］18:30－20:30
会場
建築家会館大ホール、オンライン（Zoom ウェビナー）
登壇建築家
西田司・川勝真一・海法圭・国広ジョージ・門脇耕三・津川恵理・寺本健一・山田紗子
企画・運営
蔵楽友美・羽山恵・鈴木亜里沙・北澤将司
主催
JIA 国際委員会 EAST-EAST5 WG

「EAST-EAST 5」の報告会は、冒頭に川勝真一氏がEAST-EASTの歴史、リトアニアとカウナスの概要、イベントの概要を紹介、メインテーマ「Recovery」については、様々に解釈できるこのテーマをどう捉えるか、Human / Non-human / Environmentの段階に分類してみるという補助線的視点を解説した。次に現地を訪れた8名の建築家が各々写真や動画を用いてEAST-EAST5、リトアニアの建築と都市、イベント後に訪れたエストニアについてなどの印象や気づきを共有し、対話と考察がおこなわれた。

これらのイベントのアーカイブ動画はJIAのYouTubeチャンネルでご覧いただけます。

EAST-EAST (2002)

実施期間
2002年7月27日－8月1日（展示－8月13日）
開催地
リトアニア カウナス市（Zalgiris Arena ほか）
基調講演
槇文彦
展覧会
芦原太郎、新居千秋、古市徹雄、国広ジョージ、北山恒、大野秀敏、隈研吾、古谷誠章、岩村和夫、北川原温、内藤廣、大江匡、横河健
学生ワークショップ
日本側学生17名｜加藤イオ、富田俊介、岸本秦明 ほか
公開フォーラム
参加建築家による複数セッション（一般公開）

EAST-EAST 2 (2009)

実施期間
2009年6月30日－7月4日
開催地
リトアニア ヴィリニュス市（ヴィリニュス市役所、Contemporary Art Centre ほか）
基調講演
山本理顕
展覧会
芦原太郎、国広ジョージ、横河健、古谷誠章、手塚貴晴、西沢大良、千葉学、三分一博志、遠藤秀平
学生ワークショップ
日本側学生10名｜山田浩史、野上広幸 ほか
公開フォーラム
参加建築家による複数セッション（一般公開）

EAST-EAST 3 (2011)

UIA2011 TOKYO
111 Days Before展の
一環として開催

実施期間
2011年5月31日－6月4日（展示－6月29日）
開催地
東京（行幸地下ギャラリー、銀座TSビル、JIA建築家会館）
展覧会
槇文彦、山本理顕、新居千秋、岩村和夫、古市徹雄、横河健、大野秀敏、芦原太郎、北山恒、国広ジョージ、隈研吾、古谷誠章、大江匡、千葉学、遠藤秀平、ヨコミゾマコト、手塚貴晴＋手塚由比、アトリエワン、三分一博志、中武則、松山将勝、乾久美子、田中義彰、水野行偉、赤坂真一郎、藤田摂、前田慎、芦澤竜一、荒谷省午、吉村靖孝、土井一秀、古森弘一、金城司、灘本幸子、中村拓志、武井誠＋鍋島千恵／TNA、前田圭介、美濃祐央、君興治、中渡瀬拡司
学生ワークショップ
指導｜小林正美、小林博人、赤堀忍、蓑原敬、泉山塁威‖日本側学生11名｜谷川将光、長田章吾、小原えり、笹木健太、萩野日向子、山口玲、横井丈晃、飯嶋優、井手野下貴弘、小泉麗、鈴本麻由美
公開フォーラム
大野秀敏、古谷誠章、千葉学が登壇（一般公開）
ツアー
上浪寛、高階澄人、上垣内伸一

EAST-EAST 4 (2013)

カウナス建築フェスティバル2013

実施期間
2013年9月23日－9月27日（展示－10月16日）
開催地
リトアニア カウナス市（Zalgiris Arena ほか）
基調講演
西沢立衛（SANAA）
展覧会
千葉学、古谷誠章、赤松佳珠子、原田真宏、安田幸一、家成俊勝、宮晶子、保坂猛、SANAA、藤本壮介、小嶋一浩
学生ワークショップ
日本側学生7名｜京兼史泰、平尾しえな、仲川裕里、北澤悠樹、モク・サイモン、畾（もたい）彩子、畠山秀徳
公開フォーラム
参加建築家による複数セッション（一般公開）

参加者の氏名は紙面の都合上日本側のみ掲載します。

EAST-EAST 5 キュレーターチーム

リトアニア側
Curator general: Gintaras Balčytis
Curator for the exhibition: Paulius Vaitiekūnas
Curator for the Architecture forum: Andrius Ropolas
Curator for students' creative workshop: Martynas Marozas
Curator for catalog: Jautra Bernotaitė
Coordinator: Laura Baltkojytė
Design: Eglė Simonavičiūtė

日本側
総合ディレクター｜国広ジョージ［ティーライフ環境ラボ］
ディレクター｜西田司［オンデザインパートナーズ］
展覧会キュレーター｜川勝真一［RAD］
WS キュレーター｜海法圭［海法圭建築設計事務所］
フォーラムキュレーター｜吉村靖孝［早稲田大学・吉村靖孝建築設計事務所］

JIA国際委員会 EAST-EAST 5 WG
主査｜西田司［オンデザインパートナーズ］
委員｜竹馬大二［JIA国際委員長／日建設計］
委員｜高階澄人［JIA国際委員会アドバイザー／高階澄人建築事務所］
委員｜永野ますみ［JIA国際委員／構建築設計事務所］
委員｜蔵楽友美［JIA国際委員／ファイブス一級建築士事務所］
委員｜海法圭［海法圭建築設計事務所］
委員｜川勝真一［RAD］
委員｜国広ジョージ［ティーライフ環境ラボ］

EAST-EAST 5 Document Book

発行
公益社団法人日本建築家協会 国際委員会
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館
編集
川勝真一
協力
蔵楽友美
デザイン
綱島卓也
写真クレジット
Linas Zemgulis, Kaunas Architecture Festival
（表紙／裏表紙／表紙裏／裏表紙裏／p.05／p.06 fig.2／p.07／p.08／p.09 fig.8／p.11／p.12 fig.1／p.13）
Gintaras Česonis, Kaunas Architecture Festival
（p.06上／p.09 fig.7／p.12 fig.2）
Kristina Podinskaite, Kaunas Architecture Festival
（p.15／p.16 fig.4）
印刷・製本
（株）グラフィック
発行日
2023年3月31日

JIA
LIETUVOS ARCHITEKTŲ SĄJUNGA